

日韓市民ネットワーク・なごや

会報 No.42

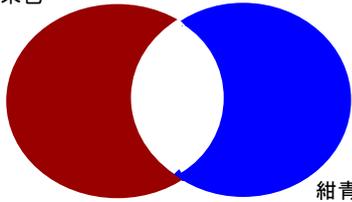
일한 시민 네트워크·나고야

2008-7-1

Home Page : <http://www.nikkannet.jp/>

発行者：後藤 和晃
〒483-8037 愛知県江南市勝佐町東郷 238
TEL/FAX 0587-56-6788

朱色



紺青

目次

- | | |
|----------------|-----------|
| 1. 事務局通信 | 統括幹事：後藤和晃 |
| 2. ニュース | 事務局 |
| 3. 会の活動報告とお知らせ | 事務局 |
| 4. 会員の広場 | 会員の皆さん |

◇ 事務局通信

事務局 統括幹事：後藤和晃

(1) 韓国・光州学生訪問団を歓迎しましょう！

～ 日本理解旅行・7月31日～8月4日 ～



例年8月は、私たちの団体にとって、韓国から学生訪問団を迎えての交流の季節です。ことしは全羅南道の光州から、YMCAの副理事長宋仁東さんの引率のもと、大学生と高校生をあわせて計15名の訪問団が名古屋を訪れます。来日の目的は、日本の文化の特色を学ぶと共に、日本の市民や学生との交流を通して、未来指向の人間関係を育てることです。

一行の5日間のスケジュールは下記の通りです。

7月31日(木) 11:00 セントレア着～バスで奈良法隆寺へ～奈良ユース泊まり
8月 1日(金) 9:00 発～興福寺～東大寺～平城宮跡～平城宮博資料館～名古屋へ
18:30 名古屋国際センターでホストと対面 ホスト宅泊
2日(土) 一日ホストと自由行動 ホスト宅泊
3日(日) 16時まで自由行動～17:00 交流の夕べ(韓国学校) ホスト宅泊
4日(月) 10:00 セントレア集合～12:00 発アジアナ機で帰国

訪問団の奈良旅行を応援してください

～ 募金目標は 20 万円です ～

私たちの団体では、例年、韓国からの学生訪問団に対し、寄付を募って、古都奈良への一泊旅行をプレゼントしています。その理由の一つは、高い航空機代（今年は仁川ー名古屋往復を韓国で買うと五万円を超えます）を払ってやってくる若者たちに、日本での滞在日数を一日でも伸ばしてあげたいということです。

私たちが受け入れているホームステイは、父親が在宅している金曜日の夕方から翌週月曜日までの3泊4日が限度としています。そこで一泊旅行に出かけることで4泊5日の日本滞在を保障するようにしているのです。



理由の第二は、奈良に行けば、韓国では全く見ることができない、1300年も前の古代朝鮮

そのままの堂塔や仏像を目の当たりにすることができることです。訪問団の学生たちは法隆寺や東大寺の伽藍や仏像に出会い、不思議な懐かしさを覚えるようです。

そして彼らは、古代の奈良で華麗に花開いた仏教文化の背景に、古代朝鮮三国の強い影響があったことを知り、誇らしげな気分になります。しかし若者たちは次の瞬間、歴史的な文化遺産の数々が、日本では1300年の時空を経て、今に伝えられている背景に何があったのか考えはじめます。彼らが目にするさりげない風景—鹿と人間が路上ですれ違う様子や美しく清潔に手入れされた民家の佇まい—なども彼らに日本人や日本文化について考えさせるきっかけになります。

韓国の学生たちが日本訪問を機会に日本人への関心や親しみを抱いてくれるよう彼らの一泊旅行を、ぜひ支援していただくようお願いいたします。

皆さんのご芳志は同封の振替用紙で郵便局から会の口座までお振り込みください。

万一、振替用紙を無くされた方は、下の口座名と口座番号で振り込みをお願いします。

郵便振替

口座名 日韓市民ネットワーク・なごや

口座番号 00830-4-36485

通信欄 交流の夕べ参加費・寄付金など、金額と共に明記をお願いします。

期日 恐縮ですが、7月15日までに振り込んでいただくと助かります。

なお韓国の大学生訪問団を迎える毎に、私たちは名古屋韓国学校で“交流の夕べ”を開いています。今回は在名古屋韓国総領事館の光州出身の領事たちにも出席していただく予定です。誘いあってお出かけください。

参加費 成人 3,500円

大学生・高校生 2,000円

中学生・小学生 1,000円

※当日は通訳ができる人がいます。楽しく会話してください。

◇ 会の活動報告とお知らせ

1.報告

1) “シニア望郷のつどい”を開きました ～4月29日～



シニア会員の中には戦前の朝鮮や満州で生まれ育ち、敗戦後、帰国してきた方々が十数名もいます。“シニア望郷のつどい”は、こうした引揚げ経験を持つ人々が集って、今昔の話題を語りあい、励ましあおうという場です。

今回のつどいは名古屋駅東の居酒屋「はなの舞」を会場にしましたが、ゲストに迎えた5人の留学生も含め16名が参加しました。シニアの方々の出身地が木浦、光州、大田、咸鏡道な

ど様々な中、異彩をはなっていたのが最高齢86歳になる長田竹子さんでした。長田さんは忠清南道の美しい街、公州で育ち、大田にある大田高等学校に進みます。卒業してからは満州に渡り炭鉱で知られる撫順で暮らしていました。多彩な経験を積み重ねてきた長田さんは声にも張りがあって、とても86歳とは思えないほど元気そうでした。そして「去年、犬山の森の中で集いがあった時も参加しました。これからも体が続く間は、ぜひ参加しようと思っていますよ」と笑顔で語っておいででした。

ところで、これまで京城（現ソウル市）出身のシニア会員はいませんでした。このほどかつての京城の龍山区で終戦の数日前に生まれたという加藤佳和さんが入会しました。この会報の会員のひろばに「63年ぶりの里帰り」を投稿していただいた方です。次のシニアのつどいには加藤さんにも出席してもらい、「63年ぶりの里帰りの感激」など語ってもらおうと考えています。

2) “古代史の巨人・蘇我氏の真実” 探究紀行 ～5月12日～

～ 奈良県明日香村 ～

10年間、積み重ねてきた日韓交流史を探る旅、今回は奈良県の明日香に行ってきました。渡来系との見方もある蘇我氏の真実に迫るという大テーマを掲げての旅でした。

参加者は24人、案内役は明日香の語り部ともいわれる猪熊兼勝京都橘大学名誉教授でした。この日は、山田寺跡をはじめ飛鳥資料館、石舞台古墳、板蓋宮跡、そして蘇我氏が邸宅を構えていたと伝わる甘檜丘など蘇我氏に係わる遺跡を貪欲に歩き廻りました。参加者の感想文は後掲（「未定」ページから）しますが、この日初めて参加した非会員の男性が目を丸くしながら「この会は美人が多いなあ」と呟いたことを特記しておきます。



参加者の感想文は4ページに掲載してあります。

3) 新留学生歓迎のつどい ～5月16日～

この日は金城学院に大田の韓南大学などから一年の予定で留学してきている女子留学生9人の歓迎会を行いました。日本側からも同数の9人が出席、計18人で懇談しました。この金城学院への留学生の世話は大田で生まれ育って帰国し、当会の発足にも尽力された故中井康雄さんが「子孫の面倒を見てやろうという気持！」と独自に始めたものでした。その中井さんも死去されたこともあって事務局がその意思を受け継いで多少の世話をしている現状です。この日顔を合わせた9人のうち、チョン・チョンとパク・ポヨンが留学の感想を書いて送ってくれたので、会員のひろばに載せてあります。ぜひお読みください。



2.お知らせ

1) 新会員紹介

前回の会報編集以降に入会された方で、6月12日までに受付完了されている方々です。(敬称略)

加藤佳和	大島 明	小澤英裕
------	------	------

☆明日香紀行感想文

◎ 蘇我氏の足跡を尋ねて _____ 会員：

安田 守

今回、京都橘大学の猪熊先生ご案内による、蘇我氏探求紀行の日帰りツアーに参加することが出来ました。現地へ着くまでのバスの中では土岐さんから、ご自身が準備された資料を基に予備知識をしっかりと仕入れていきました。

先生とは現地でお会いし、まず大化の改新の立役者・蘇我倉山田石川麻呂が創建した山田寺跡の見学から始まり、飛鳥資料館、石舞台、飛鳥寺、など10ヶ所あまりの古跡を巡る盛沢山な内容の旅でした。飛鳥資料館には修復保存の為にキトラ古墳から剥ぎ取られた十二支中の子・丑・寅の実物壁画が展示されておりましたが、それが余りに小さいのを意外に感じました。また、山田寺の東回廊の一部が朽ちることなく1,000年の眠りから覚まされて出土し、当時の姿に復元展示されていました。それは百濟文化の影響が大きいのですが、とても立派なもので、飛鳥びとの技術の高さに感心するばかりでした。

全行程を巡った中で強く印象に残ったのが、最初に訪れた山田寺跡での先生の説明でした。私は歴史には疎いので、山田寺のことは今回まで名前すら知りませんでした。法隆寺より半世紀も前に建てられた本格的な寺院であり、大化の改新の時に大きな事件が起きた所であったこと。現在、奈良興福寺の宝物館に安置されている佛頭が、その昔に興福寺の僧兵によって山田寺から強奪された本尊の物だったということも初めて知りました。



先生の説明の中で「蘇我入鹿の殺害に大役を務めた石川麻呂の孫娘に当たる持統天皇の事を、現在の薬師寺のお坊さんがいつも幼名の“うののさらら”と呼んで居るのでその訳を尋ねたところ“私はタレントの神田うのが大好きだから”と言う答えだった」と云う話にみな笑を誘っていました。

(先生によると神田うのの父親は持統天皇の大変なファンだそうです)

また、石川麻呂が謀反の疑いをかけられた末、建立中の山田寺へ逃げ帰り、一族と共に白書した直後に、石川麻呂を追ってきた刺客の“しお”と言う男が、「石川麻呂の亡骸に更に切りつけた」と聞いた石川麻呂の娘である中大兄皇子妃は、「残酷で憎っくき“しお”」とばかり、塩絶ちをして亡くなった。と、この

様に始終ジョークの様な余談を交え、笑いに包みながらの懇切丁寧な説明につい引き込まれて、面白く勉強させて頂くことが出来ました。

私はこれらの楽しい説明を開きながら、ふと去年の“百済再発見紀行”の時に現地で案内して頂いた、李タウン先生と何処か共通点がある様に思えてきました。今まで考古学者は“堅苦しい方”という先入観を持って居ましたが、其れはどうも私の誤解だった様でした。

先生が「私の父は当時奈良県文化財の仕事をしていましたが、興福寺仏頭の発見に立会った時は興奮のあまり一晩中飲み明かした」と言っておられました。この様に現場で長く発掘に携わって来られると、作業をする人々と日々苦楽を共にし、たまに貴重な遺物でも出土すれば、それこそ夜を徹して祝杯をあげることもあり、両先生のように人間的にも深みのある、ユーモアに富んだお人柄になっていくのではないかと自分なりに納得したことでした。

何れにしても昨年の李タウン先生に引き続き、今回の猪熊先生という立派な大学の教授に、一日中ご一緒させて頂きながら歴史探訪が出来たことは、本当に贅沢で幸せなことだったと思っています。

これも偏に後藤さんの素晴らしい人脈のお陰と感謝しつつ帰路につきました。

◎ 飛鳥の花組・星組 ----- 会

員：伊藤義郎

飛鳥へ向かうバスの中で事前のレクチャーが始まりました。“古墳博士です”と紹介された土岐良文さんの資料にそって進められました。分厚い資料にはこれから訪ねる地図、よく保存されていたと思われる今から26年前の山田寺跡回廊発見の大きな新聞記事を始め、主だった古墳や遺跡の空撮カラー写真、最近の飛鳥の関連新聞記事、珍しいのは「明日香村史」の一部など盛りだくさん。資料を手にした時、あちこちの席で“すごいな”、“ほー”とかの感嘆の声。土岐さんの解説を聴いて「蘇我氏探究紀行」への期待が一段とふくらみました。

近鉄桜井駅で案内していただく猪熊兼勝先生をお迎えしました。この3月で京都橘大学教授を退官されましたが、その後も超多忙の日々とか。長年親交のある後藤和晃さんのご縁で、この日をあてていただいたとの事。先生は、この日のために朝の3時までかかって資料を作られたそうです。



最初は山田寺跡でした。蘇我倉山田石川麻呂が建立したものの、最後は妻子と共に自害に追いこまれた山田寺にまつわる悲しい物語でした。先生は寺跡の発掘までの地主さんとの交渉についても初めはセールスマンと間違えられ門前払いが何度もありましたとユーモアを交えて苦労話をされました。

こんな話もされました。和田廃寺跡へ向かうバスの中で“向こうから歩いてくる人が地主さんですよ。”バスをおりてから話が続きます。“あの人のお父さんの家へ廃寺跡の土地発掘を何度お願いに行っても頑と

して聞いてくれない。漸くお許しが出て、さあ発掘しようとする地主さんが病気になられてしまった。これはひょっとすると「祟り」かもしれないということになり発掘を中断。地主さんの病気が良くなったのを待って再開しましたよ”と。先生は“ついでながら”と遠くに見える建物を指差しながら“あれは最近倒産した病院です。この発掘には関係ないでしょうが”とも。

とにかく先生はこの飛鳥一帯を長年、自分の足で歩き回られているので歴史のことは言うまでもなく、土地のこと、人のことは熟知されている様子です。そして発掘に至るまでのさまざまなご苦労も計り知れないものがあることがよくわかりました。考古学者の一面を学んだ感があります。今後、遺跡見学の時などその歴史は言うまでもなく、発掘に至るまでの考古学に携わる方達の労苦も頭に入れておかなければと思いました。

話は変わりますが、「花組」とか「星組」とか言う言葉を聞かれたことがありませんか。「清く、正しく、美しく」の宝塚歌劇のことでなく、飛鳥時代に瓦生産をした工人達のことです。昨年12月、「百濟再発見紀行」に参加した時、案内をいただいた李タウン教授から、寺や宮殿の瓦をつくるにも「花組」「星組」にわかれて生産を競ったとの説明がありました。



飛鳥寺花組瓦（十弁）

飛鳥寺星組瓦（九弁）
（どちらも奈良文化財研究所より提供）

飛鳥寺の屋根を飾った瓦にも「花組」「星組」の二つのチームがつくったことがわかっているのです。飛鳥

寺建立にあたって、百濟の威徳王（AD554-598）は、昨年末見学した扶蘇山城対岸の「王興寺」を造った造寺工、造仏工と共に瓦製造の工人をわが国に送り込みました。横道にそれますが、当時の高句麗は高僧はもとより、飛鳥寺建立資金にと金三百両を贈ってくれています。もとに戻りますが、飛鳥寺の軒丸瓦には、その模様と構造から「花組」と「星組」にわけられるのです。「花組」の軒丸瓦の蓮華紋は花びらが桜の花びらのように切れこんでいて、花卉の数が十弁。一方「星組」の蓮華紋は花びらに小さな粒が星のようについているのが特徴で、花卉の数が十一弁か九弁です。百濟から渡来した瓦工人は「花組」「星組」となって寺の近くに窯をつくり、飛鳥寺の瓦生産に励んだことが、想像されます。

飛鳥寺のあと、「星組」は近くにある明日香村の豊浦寺（現在向原寺）の瓦をつくりました。このあとは聖徳太子ゆかりの斑鳩の法隆寺の瓦を手がけています。更に「星組」は摂津に移り住み、四天王寺の瓦生産に携わっています。このことは発掘された軒丸瓦、残っている軒丸瓦からたどることができるのです。

それでは「花組」の瓦工人達はどうなったのでしょうか。その足どり、痕跡は飛鳥寺のあとわかっています。百濟へ帰っていったのでしょうか。飛鳥に住みついたのでしょうか。それとも瓦をつくりながら、日本のどこかに移り住んでいったのでしょうか。

蘇我一族のルーツは百濟の貴族の後裔とも言われています。頭角を現し、時代の主役に踊り出て栄光をほしいままにしたものの、時代の流れの渦にまきこまれ、あえなく滅びていった栄枯盛衰の跡を見学しました。又時代の変化に翻弄されて華やかな宮廷生活の中にも苦悩の日々のあった天皇や皇族の宮跡の説明も聞きました。

その一方、当時の先端技術、先進文化をもって韓半島から渡来し、大きな寺を建立し、宮殿の造営に大きく関わった人々のことを学んだのも今回の旅でした。これから幾度か明日香に足を運び、明日香の風のようにあちこちさまよって、日本の原風景を楽しみ、古代の遺跡や古墳の歴史を学びながら、古代ロマンの世界に思いを馳せたい、そんな気持ちにさせてくれたのも今回の旅でした。

猪熊先生、お世話をいただいた方々、そして一緒に旅をしていただいた皆さんありがとうございました。

あるじ亡き礼拝石や若葉寒
白シャツの子ら遠まきに石舞台
飛鳥板蓋宮跡若葉風
丈六のお顔明るき五月かな
明日香野や遠くにひとつ鯉のぼり
甘樫丘を一閃夏つばめ

◎ 明日香を訪ねて ～蘇我氏と志貴皇子回想～ ----- 会員：平松久

仁子

私が蘇我氏に興味を持ったのは、黒岩重吾氏の『落日の王子』を読んだからです。作者は、何度もこの地を訪ね小説を書かれたことでしょう。想像力豊かに、一人一人の人間を生き生きと書いておられ、すっかり魅了されたものでした。甘樫の丘に立つと、板葺宮をまるで見下ろしている様です。ここに館を建て、天皇より上にいるかに思わせませう。いったい渡来系の蘇我氏が、どの様にしてこの力を手に入れたのでしょうか。それは、資料によると、古事記孝元天皇記の系譜に、蘇我氏の名があることから、相当早くから勢力を張っていたことが分かります。雄略天皇の頃から台頭著しく、継体天皇没後の大伴、物部の弱体化の中で、欽明天皇との姻戚関係によりトップの力を持っていったのでしょう。

仏教を国に迎える事は、今なら宇宙開発かそれ以上のプロジェクトではないでしょうか。半島からの進歩的勢力であった蘇我氏が、大陸からの帰国留学生をまきこんだ保守勢力に、敗れたとも言われますが、稲目、馬子、蝦夷、入鹿と、権勢を誇った蘇我本家のあっけない最後でした。

明日香を訪れた日は、旧暦で祝うのでしょうか、鯉のぼりが泳ぎ、雲雀が揚り、風薫るのどかな昔を、彷彿とさせる日でした。ここは稲目が権力を握ってから、持統天皇が藤原京に遷都する百年のほとんどの、都とした地です。

『采女の袖吹きかへす明日香風 都を遠み いたづらに吹く (万葉集巻一の51)』

これは、明日香の宮が藤原の宮に遷都した直後に、志貴皇子が詠んだものです。志貴皇子は、天智天皇の

七番目の子であり、母は宮中に仕える采女でした。天智亡き後、後継者大友皇子が、壬申の乱で大海人皇子に敗れ、自決すると、天武朝が始まります。この時志貴は、天智系の皇子の中でただひとり、天武朝を生きぬく道を選びます。この歌の采女は、母をイメージしたとも言われ、ある意味での鎮魂歌とも言われています。

志貴皇子は、天武天皇に忠誠を誓う「六皇子の盟」に参加していますが、政治から離れた儀礼的な役職につき、比較のおだやかな生涯を送られたと思われます。

万葉集の志貴皇子の歌は、『石激(いわば)しる 垂水の上のさわらびの 萌え生(いづ)る春になりけるかも』のような「の」を繰り返す当時としては、斬新な響きや、繊細な自然詠に特徴があります。

やがて、天武朝に皇嗣が絶えた時、長生きをしていた志貴の六番目の息子である白壁王が、即位して光仁天皇となります。

光仁天皇の後を継がれた桓武天皇の母は、百濟武寧王の子孫、高野新笠であることは、よく知られていることです。



◎ 飛鳥そして蘇我氏… ----- 一般参加：山

下幸利

蘇我氏所縁の地を、考古学者の猪熊兼勝先生と共に探訪することができる、五月十二日の明日香紀行は、まさしく願ってもない機会でした。先生から直接お話を伺うことができ、又、通常の明日香訪問では足を踏み入れることのない史跡にも御案内いただき、誠に意義深い学習旅行になりました。

さて私は、明日香を訪れる時には、極力、甘樫丘に登るようにしています。飛鳥・藤原時代に想いを至すに最適の場所だからです。実際、丘の展望台からは奈

良盆地南部を一望することができます。



東方眼下の明日香盆地つまり明日香中心部の何と小さく狭いことか。この小空間に飛鳥時代の宮（都）が次々と営まれたということは、一つの驚きでさえあります。また、飛鳥川の流れを目で追いつつ藤原宮跡を遠望すれば、大和三山に囲まれたこの平原が一風水的地勢及び排水の“難”を別にすれば一当時の為政者達に宮都の適地と映じたのも頷けるし、蘇我蝦夷・入鹿父子がこの甘樫丘に館（城）を構えたということも納得できます。明日香盆地部東方の多武峰から三輪山へ、更に首を回らし西方の二上山から葛城山・金剛山の山並へと、目に映ずる全ての景色が、それらの地を舞台とした古代史上のドラマを想起させます。こうして私はこれからも甘樫丘に登り続けるでしょう。

ところで飛鳥時代は蘇我氏全盛時代でもありました。蘇我氏は馬子の代に絶頂期を迎えます。渡来氏族の雄・東漢（やまとのあや）氏を私兵のごとく使役し、大王家をも蘇我ファミリーに包摂し、対内的には、泊瀬部大王（崇峻天皇）を弑逆しても大臣の地位に微塵の揺るぎもなく、対外的には対三韓において倭国の“国主”として振舞う—これが蘇我氏に対し悪意的ですらある日本書紀に描かれた蘇我馬子の姿です。こ

のような力がどのようにして築かれてきたのか、興味は尽きません。そもそも蘇我氏の出自が謎めいています。建内宿禰の息・蘇河石川宿禰を始祖とする蘇我系譜は、もちろん史実として鵜呑みするわけにはいきません。系譜にある、満智—韓子—高麗、という人名はいかにも朝鮮半島系の出自を匂わせるものです。史上への蘇我氏の登場の仕方といい、当時の東アジア情勢といい、人名といい、門脇先生や猪熊先生が提唱される“蘇我満智=百濟官人・木笏満致（もくら・もくきょう）”説は、とても説得力ある学説です。もちろん、半島（特に百濟）の女性を妻として生じた子に半島的な名前を付け嫡子とした、とも考えられないわけではありません。しかし、これが数世代に渡り続いたと考えるのは、当時の倭国土着の豪族の有様として、いささか無理があるでしょう。とはいえ、蘇我氏が百濟官人・木笏満致の末裔だ、とする文献的・考古学的確証が無いのも事実でしょう。まだまだ蘇我氏の謎は続きます。

最後に、五月十二日の旅行への急遽の飛び込み一般参加を快く受け入れていただいた日韓市民ネットワーク・なごやの皆様へ、改めて御礼を申し上げ、拙一文を締め括りたいと思います。



◎ 紀行参加者の詩集

さとうあきこ

はっぴばり
初雲雀

軽妙な 講師の話 初雲雀

甘樫の 丘咲き初むる えごの花

方位盤 囲み指差す 夏手套
※手套=手袋のこと

少年めく 安田氏の掌に 実梅かな

薫風や 百濟にならふ 飛鳥寺





高橋孝子

つるぎいけ
剣池

甘櫿の 丘へなびけり 鯉のぼり

あげひばり ひや
揚雲雀 淡き日矢さす 入鹿塚

菩提樹の 若葉ざはめく 飛鳥寺

甘櫿へ 登る足下に 墓ひきの声

おおみなみ
大南風 さざ波高き 剣池

山本悦子

飛鳥寺

苗代の 田さの神に挿す 花の束

飛鳥寺 遠足の列 通り抜け

花楓つ 継ぎ傷頬に 飛鳥仏

甘櫿の 丘緑さす 方位盤

竹の秋 古代食「蘇」を 家そづとに
※家づと=土産



山下智子

蘇我入鹿

山田寺の 基壇かす掠むる 夏つばめ

玄室に なみの亀裂や 滴したたれる
※なみ…地震のこと

梟けり鳴けり 入鹿の果はつる 宮の址

その奥に 二上山や 桐の花

埋め戻す 入鹿武器庫か 楠くすの花



회원 마당

会員の広場

◎ 北海道で感じる日韓の接近

会員：二日

市 社

「日韓市民ネットワークなごや」の創立10年、おめでとうございます。当時、韓国KBSの日本語放送で働いていた私は、ほぼ2年前に帰国、家内の故郷の北海道東部・川湯仁伏（かわゆにぶし）温泉で暮らしています。韓国ではKBSに5年3カ月いたあと、大学で日本語を教えることになって、それが3年、そして再びKBSに復帰して3年8カ月と、都合11年11カ月、約12年間もいました。思いのほかの長期間となって、私の人生後半を大きく意味づけました。

北海道でも、のんびりとはいえない毎日です。鹿が入り込まないように高さ2メートルの柵を張り巡らした畑を作って農作業に汗を流したり、環境ボランティアなど地域の奉仕活動もしています。そしてKBSのニュースの仕事も時々メールでして、韓国との縁は今も続いています。

北海道には意外と多くの韓国人がやってきます。韓国人の人たちにとって、北海道は「近くのカナダ」であって、地平線まで続くような一本道の風景にあこがれているのです。先日も韓国の旅行会社と記者の4人組が釧路市の職員に引率されて川湯温泉にやってきましたため、私も旅館組合主催の歓迎会に招かれました。聞けば、この夏、大韓航空が釧路と仁川の間にチャーター機を10往復ほど飛ばすという。北海道では大韓航空が新千歳と仁川・釜山、函館と仁川の3路線、アジアナ航空が旭川と仁川の路線を持っているが、大韓はさらに釧路—仁川線を開設したくて、その実績づくりのためにチャーター便を飛ばす。これには釧路空港に国際線を誘致したい釧路市も大賛成で、この10往復のための集客キャンペーンに力を入れているのです。

韓国人記者の一人、雑誌「MOUNTAIN」のキム・スクセクさんは軍隊にいたとき、私が住んでいた京畿道光明市の部隊にいたということで、すっかり仲良くなり真露で乾杯しました。韓国でも最近百名山を選定したが、登山が好きな韓国人は日本の百名山に登りたい人が多い、それで北海道では今回、大雪山、斜里岳、羅臼岳、雌阿寒岳に登ってその体験を書くのだと話していました。

どうやら、わが川湯温泉も韓国からの観光客への対応を本格的に考えなければならない時期になった、いや、日本全国がそうなっているのだと、この10年間の変化を北海道でも感じています。「なごや」の会員のみなさん、北海道にぜひ遊びに来てください。それからこちらの様子は、私のブログ「屈斜路湖畔で暮らす」<http://kussharo.blog109.fc2.com/>で見てください。



◎ 皆さん よろしくお願ひします！

——— 留学生 朴(パク) ポヨン・鄭(チョン) チヨン

※韓国 韓南大学から金城学院へ留学中



私たちは桜が満開の4月の始めに大田(テジョン)から日本に来ました。名古屋という地名は何度が聞いたことがあります、どんな都市かはよく知らなかったので心配もありました。その反面、どんな出会いがあるか期待もありましたが・・・

初めて見た名古屋は、景色も建物もそして人々の印象も韓国ととてもよく似ていました。何か韓国にいるような気がして心が安らぎました。留学生活が始まってからは、学校の先生や友達や道で会った人々までも、やさしくしてくれるのですごく嬉しく思っています。

でも、やっぱり韓国と日本が違う所もありました。一番大きな違いは、日本では車が左側通行で走っていることでした。韓国の車は右側通行ですから私たちは道路を渡るとき、先に左側を次に右側を見て渡ります。名古屋に来た当初、その習慣のまま道を渡ろうとして危なかったこともありました。

もう一つ白状すると、これも最初のころのことです。「誰もいないのに車が動いている!」と驚いたこともありました。これも運転席が日本と韓国では反対にあることからの錯覚でした(汗)



また、日本に来てびっくりしたのは、日本人が何でも一人で行動することです。個性が強いからか、自立性が高いからか、それとも孤独を好むのか分からないけれど、一人でご飯を食べたり買い物をしたりお酒を飲んだりする姿がよく見られます。私たちにはできないことです。たった一回も一人で何かをしたことがないぐらい、一人で行動するというのを怖がっています。日本に来てから三ヶ月が経ちましたが、まだ誰も一人では動かず、みんな一緒です。留学の寂しさを感じないで生活することはできますが「このままでいいのか?」という思いもあります。まだ一人で行動する自信はありませんが、せつかくの留学だし韓国に帰る頃には何でも一人でできるように自立性を高めたいと思います。

ところで、今の二人の心配の種は「一年の留学中に、うんと太るのでは!？」ということです。日本食は何を食べても、よく口に合い美味しいです。食事の後にステキなデザートを「べつばら(別腹)べつばら!」と言いつつ食べることも覚えてしまいました。

韓国では「留学すると、男の子はきついバイトでやせるけれど、ほとんどの女の子は太って帰る」と言っています。確かにそんな心配もあるものの、留学生生活をうんと楽しみ、日本語が上手になって帰国したいと話しています。

◎ 人生の原点ソウル・龍山 ～63年ぶりの里帰り～ ————— 会員：加藤佳

和

「還暦」すなわち「十干十二支」人生の折り返しをむかえたとき、まず自分がこの世に生を受けた場所を出発点と決め、改めて戸籍謄本を確認したところ、

「昭和20年8月10日朝鮮京城府龍山区漢江通1丁目185地」と記載されていました。現在のソウルです。95歳の母親は数十年来認知症のため情報源にはなりません。年2回母の故郷天草へ帰省していますので、伯母(白寿=99才)が健在であり尋ねましたが、引上げの時に焼却や廃棄をしてきたため、わが家同様写真を含め手がかりは見出せません。従兄弟に伯父の

遺品を当ててもらっても戦前日本に送ってきていれば残っていたのでしょうが徒労でした。月日は経ち、訪韓を楽しみにしていた長兄は正月に鬼籍に入っていました。さぞ無念であったと思います。私にとっても7つ年長の兄の記憶に期待していたので残念でなりません。

何とか早期に訪問し仏前に報告しようとインターネット検索などで資料集めを開始。韓国の領事館、区役所では手がかりなし、日本では住所表示の履歴は確認できますが、終戦を境に日韓双方とも地図や資料は皆

無に等しいものであることを痛感しました。韓国観光公社からソウルの現在の町名と「日韓市民ネットワーク・なごや」の存在を教えていただき、後藤事務局長に連絡をとりました。後藤氏からは心強いアドバイスと共にソウルの事情に詳しい会員の武井一氏を紹介されました。さっそく武井一氏のサイトを覗いたところ幸い「龍山付近」の画像が多数掲載されていましたので、ご当人に連絡したところ国会図書館で入手した複数の地図を送っていただきました。このことがヒントになり、国会図書館のサイトで「龍山」を検索したところ10件強ヒットしたため地元の図書館に取り寄せを依頼しました。その中の「龍山小学校史・龍山会」を繰っていたところ、地図になんと父親の勤務先の表示があり勤務先に問合せたところ地番は把握されていませんでした。龍山会の方が「1丁目は三角地」あたりであろうとご教示いただき範囲を絞り込むことができました。



5月に天草への帰郷を予定しており、急きよ4月の連休で自由行動のある韓国ツアーに申込みました。土地勘のあるガイドをオプションし出かけたところ、幸運にも天の配慮か私と長兄の出生地、父親の勤務地に地縁のあるガイドにめぐり合えました。彼女のお蔭で朝食後から帰国の14時までのわずか5時間の中で上記の3地点に到達でき、二人で褒美として韓国精進料理を賞味しました。龍山地区は米軍の基地があり数年後の移転まで再開発が進まないため、ところどころ昔の面影が残っておりました。漢江洞は不動産屋が軒を連ね、ポストにも業者のシールが貼られており、バブル時を思い出しました。前3日間の金浦、慶州、伽那山、安東、丹陽、水原は最大最小の目的でなかったため、帰国後デジカメ画像とガイドブックでゆっくり堪能した始末。出生地探訪を経験され応援していただいた方々に報告したところ「特定」できたことに驚かれました。

5月22日から写真と当時の地図を携え伯母の見舞いをおかね報告に行ったところ、自分の住んでいた町名を蘇らせ大変喜んでくれました。正に景福至極の旅でした。

「昼耕夜読」の後藤事務局長と武井一氏には紙面お借りし厚くお礼申し上げます。

日韓市民ネットワーク・なごやのますますのご隆盛を祈念いたします。

晴飲雨飲亭にて記す

◎ 能楽ノススメ

会

員：武田章敬

事務局の末席に連なる武田です。本会には多士済々な方がいらっしゃいますが、中々その本性を現すことは少ないですね。実は私、日本の古典の内、能楽に深い関心があり、身内の者が師について稽古していることもあって、その社中発表会での番組解説を書いております。

五月のある日、名古屋能楽堂における、宝生流のある社中会番組表を見ると、会員の方と同姓同名の名前が見つかりました。そのある会員の方（匿名にします）は学生時代より能の基礎である謡・仕舞を稽古していることを存じておまして、「ひょっとして？」と聞いてみたら、やはり御本人様でした。

さて、催能の当日。私の本当のお目当ては祝言能である狸々乱ですが、会員がシテを勤める舞囃子「高砂」がありますので、朝から能楽堂へ。切戸口が開き、シテが出で、歩み、所定の場に着座し、…という一連の動きに基礎が確実に出来ていることが見て取れます。私がおの方の舞を見るのは初めてでして、どの程度の

技量があるのか不明でしたが、着座中も立った後も目の動きが厳しく且つ安定しており、足の運び、そして型の揃えと動きも切れのある気持ちの良い動きをしており、並の方ではありませんでした。師範級の舞とあって、初めて見る宝生の高砂、観世との違いを見い出しながら、拍子が若干速い神舞の颯爽な舞を堪能させていただきました。

聞けば毎年能楽堂で社中発表会に参加している由。さらに聞くと、かつてお能のシテを勤めたこともあるそうで、道理で型が決まっている、大変気持ちの良い動きをなさっていたのでした。それだけに今まで舞台上に上がっているのを知らせて頂けなかったことが悔やまれます。

で、題の「能楽ノススメ」ですが、我々にとって国際交流に必要な物は、相手国の文化を習得するものもそうですが、やはり第一義的には、わが国の文化をもっと知ることかと思えます。互いに相手を知るに、こちらのバックボーンの深みが重要と思えます。

能は世界無形遺産登録に内定しており、私の最目ではありますが、わが国の文化として外国の方にお見せしたと思っておりますし、簡単な謡だけでしたら、いろいろな会合の場でも演じることが出来ます。

しかしそんな能ですが、今の人にはなかなか観る機会が無いですね。でも外国の方に以外と関心のあるお能を、せめて一度くらいは見ておきたいモノですね。さらに言えば、稽古の手ほどきを受ければ、人生観が豊かになると思いますよ。また立居振る舞いも優雅になり、やがて綺麗な姿になる…ちょっとオーバーですが、そんな要素もあるんです。



編集後記

(2008/6/26)

会報 No. 42 をお届けします。気温の変化が激しい時期になりました。皆さん体調など崩していませんか？

さて、当会の夏の一大イベントと言えば、韓国からの学生交流団の来日です。今年も韓国の青年がたくさんやって来ると思います。どんな出会いがあるのでしょうか。楽しみですね。

池貴巳子さんのイラストは、NHK ラジオ講座 1997 年度から、韓国の古典を題材としたものです。

編集：早川 潤

MAIL junhykw@pop12.odn.ne.jp